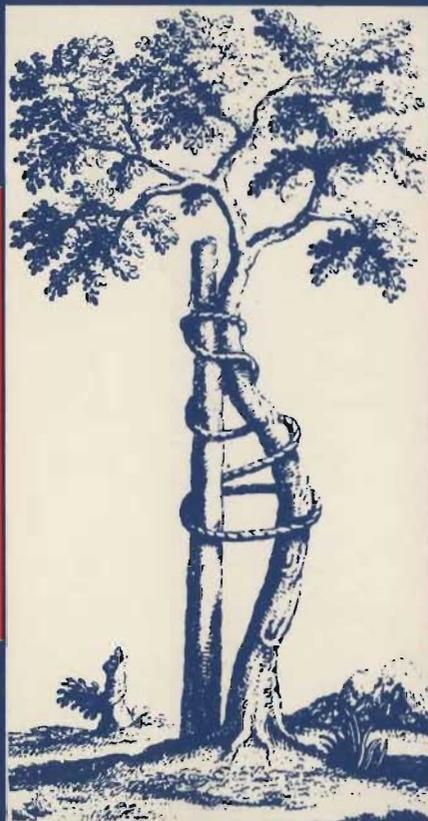




ふるさと



前田整形外科開講50周年記念号



前田和三郎先生略歴

明治27年7月28日

大阪市東区高麗橋2丁目で、

前田福松氏の四男として生る。

大阪府立北野中学、第三高等学校を経て

大正5年

京都大学医学部に入学

大正9年9月

同学卒業、引き続き、京都大

学医学部助手

大正11年11月

同医学部助手

大正12年6月

京都大学大学院入学

大正14年2月

医学博士

大正14年2月

京都大学医学部外科学講師

大正14年3月より9月まで

アメリカ、フランス、ドイツに留学

大正15年2月

熊本医科大学教授

附属病院整形外科医長

昭和3年12月

慶應義塾大学医学部、整形外科主任教授に就任

昭和19年8月より21年7月 ビルマ、タイ等で活躍

昭和21年10月より慶應義塾大学附属医学専門

部の外科教授を兼任

昭和26年12月より公務員共済立川病院院長を

兼任

昭和32年

慶應義塾大学医学部外科学主任教授を辞任

昭和34年より

横綱審議会委員

昭和39年4月

慶大医学部外科学教授

退職。以後名誉教授

昭和45年

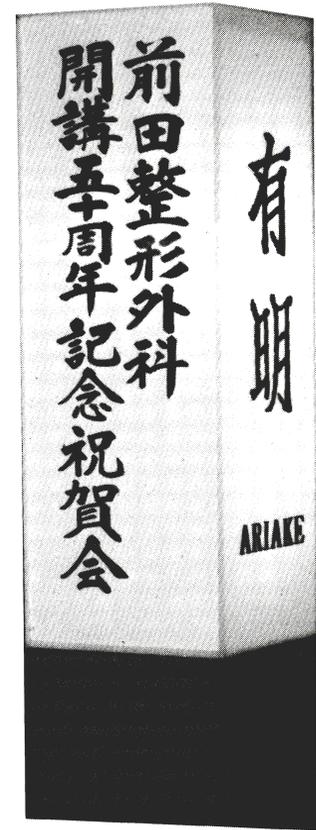
立川病院院長を辞任

その後51年迄、同病院顧問

この間、第10回、および第18回日本整形外科学会会長、第51回日本外科学会会長、第6回日本外科学会会長、第6回日本胸部外科学会会長、第4回日本麻醉学会会長を歴任



岩原寅猪名誉教授





名倉重雄名古屋大学名誉教授



伊藤同窓会長より記念品贈呈



片山良亮慈恵医科大学名誉教授



近藤鋭矢京都大学名誉教授

科開講五十周年記念祝賀会



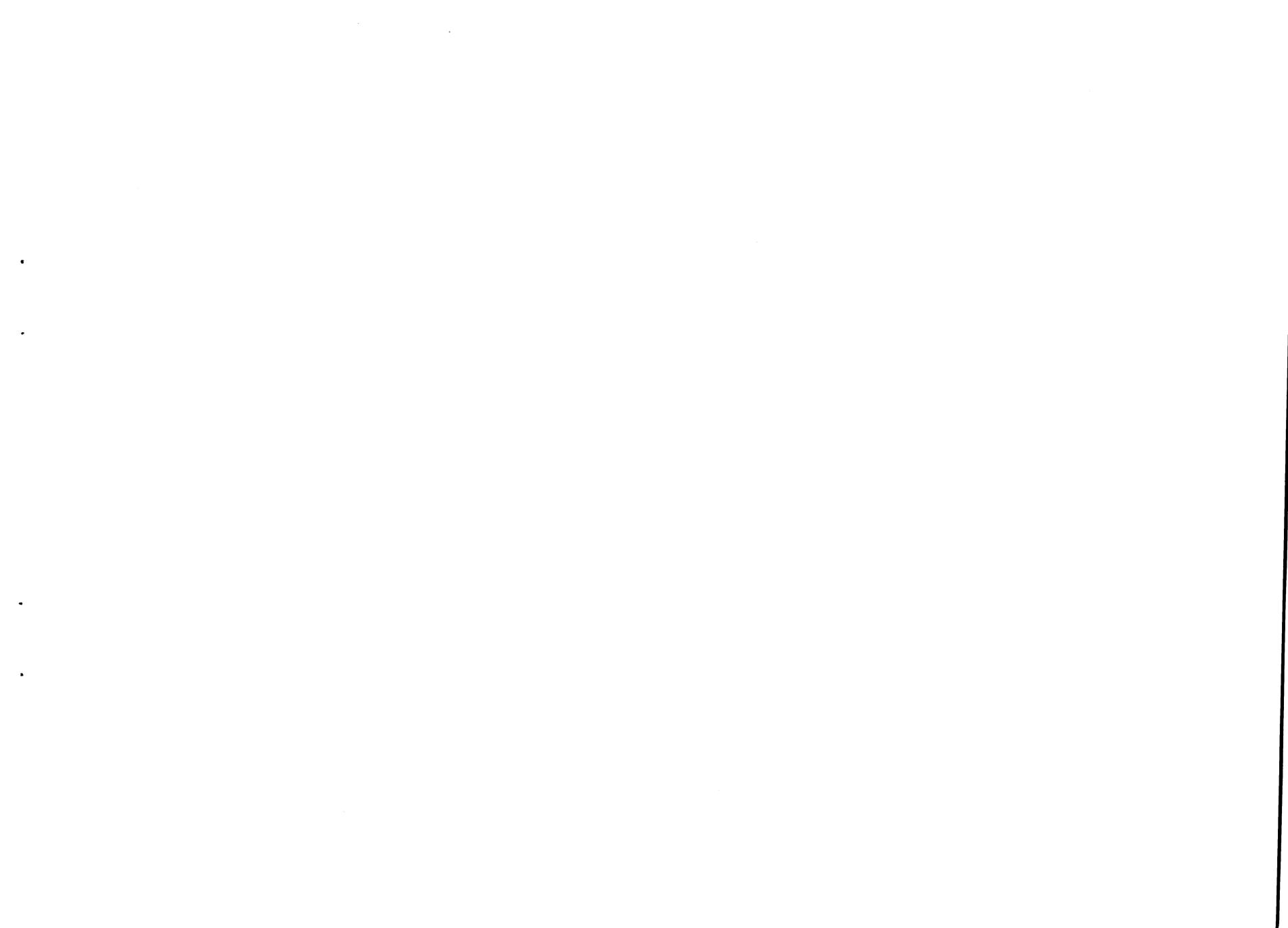
天児民和九州大学名誉教授



西新助東邦大学名誉教授



野崎寛三東京医科大学名誉教授



目次

一、	卷頭の辞	同窓会会長	伊藤原	1
二、	前田整形外科開講五十周年記念祝賀会 速記録			3
三、	新人紹介			22
四、	教室人事			28
五、	慶弔のお知らせ			31
六、	開業			31
七、	住所変更等			32
八、	編集後記			34



巻頭の辞

同窓会会長

伊藤

原

月日の経つのは早いもので、会員の皆さんの期待にそうよう願ひながらも、何もできないままに会長就任以来二年間が経過してしまいました。一昨年以來学会の開催、伊藤教授の形成外科学会会長就任、久保院長のパラプレジア学会会長就任、前田先生開講五〇周年記念祝賀会等々に対し、多額の御芳志をよせられた会員諸氏の御協力に対し、改めて厚くお礼申しあげる次第です。

新発足後多少なりとも変わった仕事としては開業の先生方へのお祝いを品物に改め、楯をお贈りすることにした。また、卒業六年間の研修生活を終え、指導医として新に発足される方々のため、その將來の発展飛躍を願って記念品を贈呈することにした。心から諸君の健康と御活躍を祈って止まない。教室を出て開業したり、或は関連病院以外の病医院に就職すると、いつとはなく教室とは縁遠くなり、教室に対する関心や愛着もうすれ、相互の連帯や交流も失われがちになる。そこで教室運営委員会報告を改めて同窓全員にお届けし、教室の現状と関連病院の実情等をお伝えし、母校につながる同窓諸氏の相互理解を深めていただくよう願っている。

本年度の同窓会誌「ふるさと」は、前田先生開講五〇周年記念号とし、祝賀会に関連した記事を掲載することにしたが、このような企画について会員諸氏のご諒承をお願いする次第である。

過日幹事一同にて前田先生のお宅をお訪ねして、祝賀会の記念品として会場の実況を録音したテープレコード、会場の写真帳三冊、現金二三〇万円をお贈りいたしたところ、先生は直にこのお金は同窓会基金として寄付するから有効に使われたいと申され、更に別に三〇万円をくだされ、向後三年間、毎年一〇万円を優秀な研究を發表された方に前田賞として贈りたいとお言葉であった。私共は先生の同窓に対するお心づかいに感激し、なんとご返事申すべきかしばらく当惑したが、御芳志にしたがい有難く頂戴することにした。同窓一同に代り心から感謝の意を捧げる次第である。

前田整形外科開講五十周年記念祝賀会

昭和五十三年十月一日

於 ホテルオークラ・有明の間

司会 田中一雄先生

「前田先生がご入場になられます。拍手をもってお迎え下さい。」（盛大な拍手）

「ただ今より、前田整形外科開講五十周年記念祝賀会を開催致します。はじめに、開会の詞、池田亀夫先生お願い致します。」

池田教授

「前田先生が昭和三年十二月に慶應の整形外科の教授として来られましたから、すでに五十年を経過いたしました。で、この今日の基礎づくりをされたわけでございますが、まあ五十年と簡単にいいましても、一般的には教授に就任してから五十年たつても、なお壮健であられるということは、そうめつたにあるものではないかもしれません、余程の好条件にめぐまれませんと、一般的には不可能であるといつてもいいと思います。こういう点におきましても、教職員は心から祝福できるわけでございます。この点同窓会の有志と語りまして、今日の式典に至った次第でございます。なお、本日は、名倉先生、近藤先生御夫妻、それから片山先生御夫妻、天児先生御夫妻には、公私ご多用のところ、まげてこの会にご来臨いただきまして、ありがとうございます。世話人を代表しまして、厚く御礼申し上げます。これをもちまして、開会の詞を終りたいと思います。」

司会

「ありがとうございます。つづきまして岩原寅猪先生のご挨拶をいただきましたと存じます。お席のまま、そちらへ今マイクをお持ちいたします。」

岩原先生

「ご挨拶申し上げます。秋晴れの今日、全国から、同窓が大勢集まりまして、前田整形外科開講五十年を祝うことができるのは、ご同慶の至りでございます。実は、我々の教室の歴史は、大正十一年に始まりまして、前田友助先生、(偶然に同姓であります)、前田友助先生により、整形接骨科という名前で発足したのであります。前田友助先生は東大の近藤外科のご出身であられました。我々学生時代には先生は、主に外科の方をやっておられましたように、ドイツ式の、あるいは、フリッツランゲ式の整形外科は、前田友助先生の下で、助教授の桂秀三先生が主に当られておりました。ところが昭和三年に両先生が、相次いで退職されました。昭和三年の十二月に、前田和三郎先生をお迎えすることができたのであります。そして教室も整形外科と呼ばれるようになりました。いふなれば我々の教室は、前田和三郎先生をお迎えして、はじめて、名実ともに、整形外科学教室となり、前田整形外科が発足したという次第であり、そういういきさつから、この会を、あえて、前田整形外科開講五十周年記念としたわけであります。教室は、友助先生が大正十一年に始められましたから数えますと、今年は多分五十七周年にあたりますが、あえて先程申しましたように、前田整形外科開講五十周年として、この会を開くに至りました。でありますから、本来は、うちの催しであるはずであります。前田先生のご希望もいただきましたので、先程池田教授からご紹介がありましたように、名倉先生以下のご来賓のご臨席をいただきまして、錦上花を添えるというかたちになった次第であります。

我々はこの会に、前田先生が八十四才のお年で、なお赫灼としておられることをお祝いし、そしてまた、我々の教室の礎を置いて下さったことに対する感謝の意を表するといふこの二つの意をこめておることを、敢えてご紹介いたします。

先生は昭和二十一年迄教室を主宰されまして、外科にかわられて、外科の教室の再建に努力されたのであります。先生が教室におられました間に、先生は整形外科学会の会長を二度され、宿題報告も二度されました。そして戦争の末期には、南方のビルマに医療宣撫班と申しますか、医療団の団長として、たまの下をくぐられ、現に負傷されておられるのであります。そういう経歴を持っておられます。今日なお、お元気であらましまして、先程もお伺いしますと、間があれば、朝十時半から家を出て、八重洲口にあります日本棋院に通って、碁を楽しんでおられるとのことでございます。

その他に、横綱審議会委員であられ相撲にはなくてはならぬ存在になっておられます。先程申しましたように、このご健康を祝い、ご恩を重ねて感謝いたす次

第であります。教室も創設五十七年、前田整形外科開講五十年になります。いよ
いよ盛んになっていただきたいと存じます。

ここにお集まりの方は、多くはお兄さん達でありまして、若い方の集まりが少
なくて淋しい思いであります。先程から申しましたように前田先生を中心にし
た集いということで、こういうかたちになったかと存じます。

どうか、ごゆっくりご歓談下さいませようお願いします。本会の主旨を語り、
式辞にかえさせていただきます。ありがとうございます。」

司 会

「ありがとうございます。次に前田和三郎先生がご挨拶なさいませ。」

前田先生

「本日は、かくも多数の方がお集まり下さいまして、誠にありがとうございます。
又、特に古い大学の代表の方もご招待いたしました。ご参加下さったことを、
厚く御礼申し上げます。」

私は先程述べられましたように、昭和三年十二月三日に、慶應義塾大学の医学
部に着任いたしました。その当時は、私が独りでまいったものでございますから、
独りでは何も仕事ができない。それで当時外科教室の主任でございました茂木先
生にお願いをしまして、外科の教室から、五、六名の方を *rotate* していただく
いう方法で始めました。そのうちに大学の卒業生も、ぼつぼつと入室して下さる
ようになりまして、外科からの *rotate* は自然消滅のようになかたちになって、だん
だんと整形外科教室が盛大になってまいりました。

私の在任中にやりましたことは脊椎外科を担当いたしました。脊椎腫瘍、脊髄
損傷等につきましては、整形外科のお家芸とするようななりゆきになりました。
脳神経外科の方よりも、整形外科の方のほうが、この点については、優れていら
っしゃいます。これは私の最も自負するところでございます。

又、骨折の療法につきまして牽引療法を主張いたしました。これは、骨折とい
うものは骨髄組織自体がなおすものでありまして、いたづらに骨折の部分に、大
きな異物等をもって固定することは、骨を温存する上からは、非常な障害であっ
て、偽関節のようなものが非常に多い。牽引療法では、偽関節が出来るというよ
うな例は、ほとんどございません。ことに、幼小児の上腕骨顆上骨折の垂直牽引
療法は非常に自分でも優秀な治療法だと思っております。

その他もございませぬが、まあそれ程取り上げるものもございませぬので、この

位にいたしておきます。

本日は、どうも、私を中心とした会をお開き下さいまして、誠にありがとうございますございました。衷心より感謝いたします。」

司会

「ここで、前田先生に記念品を贈呈いたしたいと存じます。

前田先生、恐れいたしますが、こちらをおむき下さい。記念品贈呈、伊藤原先生
お願いいたします。」

伊藤同窓会会長

「本日のこのおめでたい席におきまして、お元気な先生のお顔を拝見し、心からお祝い申し上げます。先生、これからもどうぞ、お身体には充分ご注意ください、いつ迄も、いつ迄も、お元気で、私共弟子達のゆくえを見まもって下さい。同窓一同よりの、ささやかな記念品ではございますが、どうぞお受け願います。」

司会

「つづきまして、ご来賓のご祝詞をいただきたいと存じます。先ずは、名古屋
大学名誉教授、東京厚生年金病院名誉院長、名倉重雄先生お願いいたします。」

名倉重雄先生

「本日は、前田先生おめでとうございます。お天気がよくなりました、いい日になりました。私は前田先生とは同じ年令ではないかと思いますが、明治二十七年二月に生れております。先生は七月生れ、私は二月ですから、私の方が少し年寄りかもしれません、しかし先生は、ご覧のように、何もなさらない。私は、何か、耳の辺へ入れると、大変に耳が聞こえるのですが、何もないと、どうもこっちの耳が少し具合が悪いのでございます。私は先生と学問上の事について、お互い反対の方に歩いて、衝突したことはございませんが。

私が唯一つ感謝しているのは、私の末の弟で、名倉厚（あつし）というのがありまして、これが、今席にいらっしゃる方の、お古い方には、ご承知かもしれませんが、その後、慶應義塾で病理の教室におりまして、或いは、そのまま先生のかばん位は持たたかもしれませんが。これが死ぬ前に北海道の旭川にまいって、勤務しているうちに、病気になるしまして、大変に先生のお世話になりました。そういうことで私はただ先生に心から、感謝しているものでございます。別に私は、

先生のなにを申し上げるわけではございませんが、非常に個人的にそういうお世話をいただいたということが、私は今忘れないで、ここでひと言、先生にお礼を申し上げて、私のお礼としようと思うわけでございます。

ありがとうございます。ごきげんよろしうございます。それではまた。」

司 会

「ありがとうございます。つづきまして京都大学名誉教授、静岡労災病院名誉院長、近藤鋭矢先生お願いいたします。」

近藤鋭矢先生

「前田先生の、前田整形外科開講五十周年という、大変おめでたい今日の日よき日に、私も家内までも、こうしてご招待をいただきまして、ここで皆さんにご挨拶を申し上げる機会を与えられましたことを本当に光栄に存ずる次第でございます。」

日本人の平均寿命が非常にのびてきているわけですが、前田先生には、それをずっと上廻って、八十四才というお年になられて、まだかくしゃくとしておいでになるし、なお又、厚生省関係の公職にもついておいでになり、ご活躍をなさっておいでのなるということ、本当におめでたいことと存じます。私ども、後輩も、先生のこういう現在のご活動の状態を拝見しまして、本当に心強く感ずる次第でございます。

前田先生が、京大をご卒業になったのは、大正九年であります。私が京大を出ましたのが大正十五年でございます。私が医局に入った時分には、もう前田先生は熊本医科大学の教授として、ご赴任になって既に京大の方にはいらつしゃいませんでしたけれども、医局の皆さんが前田先生のお人柄に、非常に強い親愛といますか、本当に前田先生をおしたいするような気持が強かったとみえまして、医局でのよもやま話の時に、前田先生のお名前が非常によく出たわけでございます。

先生は大学の学生の頃、京大ボート部の選手でございまして、非常にご活躍になったのでありますが、先生の先生と申しますか、伊藤弘先生も京大のボート部の選手でありまして、そういうことから、伊藤弘先生も前田先生のお人柄を非常におすきのように拝しましたし、又、平素非常に信頼になっておられました。それで伊藤老先生とのよもやま話の時に、前田先生のお名前が、しじゅう出たわけでありまして、それで前田先生は、もう熊本の方においでのなつてしまつてい

たわけではありますが、私もそういうわけで、前田先生を、非常におしたい申ししておったわけでございます。

そのころ医局で先生のニックネームをききますと、「もくじき先生」というニックネームがついておったそうであります。「もくじき」の「もく」は木ではなくて、「沈黙」の「黙」であります、先生は平素非常にお口数が少くて、お食事の時には、もくもくとして非常に健啖ぶりを發揮されたということで、「もくじき先生」というお名前がついておったようであります。

伊藤老先生も前田先生もそうありますが、非常にお酒がお強い、非常によく運動なさって、そしてお酒を沢山召し上がり、又いろいろとお食事を沢山召し上ったということが伊藤先生にしても前田先生にしても、今日のように長寿を保たれる秘訣であつたのではないかとというふうに、拝察するわけでございます。

私は、前田先生の学問に対する態度と申しますか、そういうご様子を平素拝見しておりました、重戦車が動いて行くような、壮重な感じを与えられました。そこへもってきて、岩原先生という、日本の整形外科でも有数のはりきりがついておりました、慶應義塾大学整形外科の気風と申しますか、研究態度と申しますか、そう言ったものができ上ってきたのだと思います。私は本当に、迫力のある教室の気風に平素非常に敬服をしておったわけでございます。伊藤老先生も常におほめになっておられました。今度こちらへまいります時に、伊藤老先生のお宅へまいります、前田先生に何か、お言づけはございませんかと伺いましたところが、先生は、「自分はもう非常に耳が遠くなつてしまつて、人と話ができないようになつてしまつたので、とうてい東京迄出掛けて行くことはできないから、手紙を出しておきました、くれぐれも、前田先生にお元気で、いつ迄も世の中の為に、ご活躍をいただくように、君からよろしくお伝えをしてほしい。」と、そういうお言づけをいただいております。

慶應義塾大学医学部は、前田先生をはじめ、京大卒業の私どもの先輩たち沢山の教授がまいます、かつて、非常に御活躍をなさつたのであります。又、私のことを申しまして非常に恐縮ですが、私の義兄片山弘が、ここに居る家内の兄であります、慶応の卒業生でございます、今小岩の方で開業をしております。それから、又、私の次男が、慶應の薬理学教室で阿部勝馬先生のもとでお世話になりました、なんとか一人前の者にしていただきました。現在北里大学獣医畜産学部で薬理学を担当しております。そういうこともございまして、平素慶大医学部を、非常に身近かに感じておったわけでございます、今日、こういうおめでたい席に、お招きをいただきましたことを、本当に心からありがたく存じておる

次第でございます。

前田先生には、今後共にお元気でおいで下さいますようお願いを申し上げます。

司会

「ありがとうございます。つづきまして、慈恵医科大学名誉教授、東急病院長、片山良亮先生お願いいたします。」

片山良亮先生

「前田先生には、開講五十年と申しますか、講座をもたれてから五十年をお迎えになられました、誠にめでとう存じます。講座をもたれてから五十年という年数は、私、非常に永い年数であると思うのでございます。

私は昭和二年に大学を卒業いたしました。岩原先生も同じ年にご卒業になっておられますが、それから直ぐに整形外科医として、実社会に出たわけでございますが、それから数えまして、丁度五十年か、五十一年位になるのでございますが、これは、そんなに永いとは思いません。もうじきに、過ぎ去ったように思います。しかし、講座をもたれてから五十年というのは、大変に永い年数であると思います。例えば、私が講座を持ちましてから今年で三十三年になるのでございますが、これが五十年ということになりますと、まだ十七年もございまして、十七年と申しますと私の年令で申しますと九十才、或いは九十才を越えないと、五十年を迎えることが出来ないのでございます。本当に永い、また尊い五十年であるかと私、思った次第でございます。前田先生、まことにめでとうございませぬ。

それで、私、五十年前の整形外科の先生方の、ひとつ、思い出をここで一寸お話を申し上げてみたいと思うのでありますが、当時は大変に大きな先生が沢山おいでになりました。田代義徳先生も大変にお身大きい方でした。そのほか、新潟の本島一郎先生、それから日赤の陰山家先生、それから先程お話の出した京都の伊藤弘先生、前田友助先生、また慈恵大学の片山國幸先生等、いずれも横綱級の大きな方でした。そこへ前田先生がお入りになりました。整形外科はますます巨大化して威風を誇ったのでございます。これは一寸、話は横道にそれるかも存じませんが、当時私は整形外科というのは大変に大きな人の多い所だと思っておりましたが、私の方の慈恵の整形外科の医局も、大きな男が集まりました、当時平均体重二十五貫、百キロと言っておったのでございます。で、

当時私は二十一貫で七十九キロでしたから、そう小さい方ではなかったのですが、それでも、「お前のような小さな奴が来たから、平均体重が下った」と言っただけであつたのでございます。

それから、これは昭和七年であつたかと思ひますが、整形外科の総会で脊椎カリエスが宿題報告にとり上げられました。私が脊椎カリエス患者血液の理科学的性状と日光浴の影響、それから京都の土屋準一先生が脊椎カリエスの脊椎固定術、それから前田先生が脊椎カリエスの症状と診断と言ふ様なことを担当せられたのでございます。そして、その宿題報告も三人共無事に済みまして、それじゃひとつ慰労会を開いてやろうと言ふので、教授の先生方、又大先輩の方々が宴会を持つていただいたのでございます。当時の整形外科の教授、又大先輩の方々の中には、大変に芸の達者な方が多うございまして、踊りの上手な方、歌の上手な方、又三味線の大変に上手な方等仲々多かつたのでございます。ところで、その宴会の途中で、前田先生が一寸中座をなさいました。それで私、「あつ、どうなさつたのかな」と思つて居りまして、そして、しばらくたちましたら、芸者の三味線が急に安来節に変わりましたので、「あれあれ」と私が思つて居りましたら、むこうの方の入口から、大きな男の方が頬かむりをしまして、そして白い浴衣を着まして、尻っぱしよりをなすつて、そしてざるを持って踊りながら出ていらしたのでございます。それが大変に大きな方でありながら、踊りがお上手で、しかもコミックに踊られるものでありますから、もう拍手喝采、大変な騒ぎでございました。前田先生は、今でもそうであるかと存じますが、当時から大変に物静かな温厚な方でございましたが、あの方が安来節を踊つたと思つて、私びっくり仰天をした次第であります。それで私、「ひとつこれは前田先生にあやかつて、私も踊りの一つ位は、ならつておかなきゃならない。」と思ひまして、私の父にそれを相談致しました。私の父も仲々踊りも上手ですし、又、歌も上手でございました。ただ、相談をしましてはニヤニヤしているだけでございました。しかし、とうとうそれは実行に移されませんで、私は現在も踊りは出来ず、歌もうたえず、まあ歌でも君が代がやっこさ歌えるか歌えないかと言ふ程度のものでございます。

大変につまらない昔話を申し上げましたが、どうぞ前田先生には、これからますます御健康にあらんことをお祈りしてやまない次第でございます。どうも失礼致しました。

司会

「ありがとうございました。続きまして、九州大学名誉教授、九州労災病院院長、天児民和先生にお願い致します。」

天児民和先生

「前田先生、本当に今日はおめでとう存じます。九月の十一日に前田先生と対談をしました。何かこういう会をなさるなら、記念になるものを残したいと、こゝろ思いました。先生と対談をしまして、その原稿を今整理をして居りますので、残念ながら雑誌に出ますのは来年二月になりました。その対談で私が知りましたことは、色々有るんですが、先生の今日迄歩まれた道はですね、決して平坦では無かったことを知り先生の御苦勞を考えますと誠に頭が下る思いが致します。先生は、かつては放射線の勉強をする為に藤浪先生の所に何ヶ月かお見えになった。その藤浪先生と言うのは物凄くやかましい先生で、ところがその藤浪先生が前田先生を非常に信頼なさったそうでございます。それから熊本に先生がおいでになって、慶應に先生がお移りになるのも、藤浪先生が『あれなら良い』と言う非常に熱意で、先生が慶應においでになったと言う話を聞いておるのであります。

それから先生は慶應においでになりました、昭和三年に教授になられました、昭和八年には前田整形外科と言う立派な教科書を書いておられます。今日あの書物をずっと拝読しまして、あの時分によくこれだけのものを書いたと私は実はびっくりするのであります、『どう言う様にして書かれましたか』と言うことを私が質問しますと『あの時分には、もうわしが書こうと思つてたらどんどん、どんどん書けるんだよ』と、そう言う様な先生のお話で、もう非常に心身共にもっとも積極的で充実しておられたんじゃないかと私はそう思います。

又、先生は結核・骨折・それから今お話になりました脊髄外科の方面にも多くの功績を残されましたが、もう今思い出すのは、先生が昭和十年に、外科、整形外科の合同宿題として、私の恩師の神中先生が股関節外科、それから前田先生が脊髄外科をおやりになったんですが、この間も一寸、『あれは先生、何時間位講演なさったんですか。』と聞いたたら三時間半しゃべったと言うんで、それが先生は朗々として話されるんで、まあ多少モノトニッシュな所はあったんですが、しかしあの講堂のどこまでもよく通るのです。朗々として先生はおやりになりました。その晩神中先生と色々、まあ『御苦勞であった。』といつて『お前も一杯やれよ』と言うんで酒を呑みながら前田先生の事を先生に一寸お話しましたら、『あの先生は、辛抱の良い先生だよ』と、『そして、真面目だよ。しかし人間は

真面目ばっかしでは駄目だぞつ。』と。『あれは泥鰌すくいを踊らさしたらうまいんだぞつ。』と言う話を先生から私、聞きました、神中先生はこれも飲む方ばっかしで芸が全然無いんです。それで非常に前田先生の芸に感じていられました。なお又先生は、戦争中ビルマに出られて、それから引き揚げて来る時に、英軍の飛行機の空襲にお会いになり、現在もなおこの鎖骨上部と脛骨部に、まだ弾片が入っておるそうであります。先生はそして御自分で『だからおれは鉄筋コンクリートだよ』とおっしゃったんでございますが、そう言うようにまだ意気軒昂たるものがございます。どうぞ先生、今後共長生きをして、我々も、もつと僕よりも若い人もそこにお見えてございますが、そう言う人達の先達として御指導を賜りたいと存じ上げて居ります。どうも失礼致しました。』

司会

「ありがとうございます。これでご来賓のお祝詞を終わります。重ねてありがとうございます。御礼申し上げます。」

式典の結びと致しまして、乾杯をいたしたいと存じます。恐縮ですが、ご起立願いたいと存じます。

乾杯の音頭を、畠中卓助先生お願い致します。」

畠中卓助先生

「ご紹介いただきました畠中でございます。はなはだ多数ご出席の中で、僭越でございますが、ご指名でございますので、乾杯の音頭をとらせていただきます。前田整形外科五十周年を、心からお祝い申し上げますとともに、先生が我々に与えて下さいましたご恩に対して、心から御礼を申し上げます。又、八十四才でなお、かくしゃくとしておいでる先生が、今後ますます御健康で、やがて米寿を迎えて、又我々のこの集りが、できますように祈願いたしまして、乾杯いたしたいと存じます。」

乾杯!!

「乾杯!」

「どうもありがとうございました。」

司会

「ひきつづき祝宴にうつります。どうぞ、ごゆっくりと、お食事、御歓談いただきますと存じます。」

司 会

「お食事中、大変恐縮でございますが、お集りの先生方にお話をいただきましたと存じます。」

前田先生にちかしい先生として、野崎寛三先生ひろみつ、お願いいたします。」

野崎寛三先生

「私、昭和七年に慶應を出まして、直ちに整形外科教室に入室させていただきました。そして今日に至っておりますが、入局しましてすぐ脊椎カリエスの早期診断という宿題がございまして、その下働らきに、非常に忙殺されました。また数年たちますと、今度は脊髄外科の宿題報告ということで、ここに坐っております。また、小泉、大内、そして私、この五人が、大体、宿題報告の研究内容を作った若者で、岩原先生には非常にきびしく御指導をたまわりました。あの宿題報告は、今もって非常になつかしく、かつ、私どもが研究の結果として、学位をいただきましたことを、厚く御礼を申し上げます。その後、都立の大久保病院の整形外科医長を経まして、東京医大に就任し、三十二年間教授職を勤めました、この三月に、無事停年退職させていただきました。」

その間、昭和三三年には、身にあまる光栄として、日本整形外科学会の会長にも御推薦いただきましたし、宿題報告、共同研究等も御推薦いただきました。まあ、私の仕事も、まあ、無事果たせられましたことを、これひとえに、前田先生の御指導と、今もって感謝しております。

今日ここに私ども長い整形外科学会会員の仲間がこれだけ集まりました、先生のお祝いを申し上げていることは、非常に感慨無量でございます。なお、最近には、整形外科学会の名誉会員にもさせていただきましたことは私一生の身に余る光栄でございます。

私ごとではございますが、私共夫婦は、前田先生の第一号の御媒酌をたまわりまして、お蔭様で、男三人、女二人、孫七人ということで、これもまたプライベートながら、前田先生に厚く御礼申し上げます。

なお、かつ、その後、前田先生の御推薦で、恩給局の顧問医をいたしております、毎週一回、前田先生のお顔を拝見することが出来ますことは、非常に幸福でございます。

又、そのほか、前田先生が横綱審議会の委員になられましてから後、相撲協会の診療所顧問として、朝夕以下、輪島、大鵬、その他殆んどすべての横綱等の診療に関係しましたこと、これも非常に印象深く存じます。これからは、前田先生の後を追いついて、前田先生のおしりを持ち上げながら、そして前田先生の後を追いかけて暮らしたいと存じております。

前田先生おめでとうございます。」

司会

「ありがとうございます。つづきまして、小泉次郎先生お願い致します。時間が充分ございますから、面白いお話がございましたらどうぞ。」

小泉次郎先生

「ご指名にあずかりました小泉でございます。五十周年記念祝賀会に臨みまして、前田先生の大変お元気なお顔を拝見して、本当に嬉しく存じました。またご来賓諸先生方は、これまた、私が前田先生の教室にお世話になっておりました時と同じお顔をして、皆々様大変お元気で、何よりのこととお慶び申し上げます。

私のおりますこの卓子には、一番上の兄貴と申し上げるより親がわりといつてよい、岩原先生をはじめとして、畠中、野崎両賢兄、同級生ながらすべて私の師表になっている伊藤の原さん、先輩ながら基礎におられたので、整形外科に少し遅れて入局された臼田の兄さん、更に異色の弟として、江戸下町っ児の代表人物大内正夫君がおります。

この卓子以外の席にも、私達青春時代の一駒一駒が懐しく想い出される沢山の親しい顔が揃っています。時間の都合で夫々に詳しくお話しをする訳には参りません。

改めて前田先生、御来賓の諸先生方、整形外科教室全員の御健康と教室の益益御繁栄になられるようお祈りして私の祝辞とさせて戴きます。御静聴有難うございました。

司会

「ありがとうございます。暫く間をおきまして、大内先生をお願いするつもりでございます。」

「テーブルスピーチを、続けたいと思います。最も期待されている大内先生宜しく願っています。」

大内正夫先生

「大内でございます。座談は少々上手いのでございますが、テーブルスピーチとなりますと、内気でございますので、たいへんお耳をけがすことになり申し訳ございません。」

私、昭和九年の卒業でございまして、整形外科に一人で入りました。その時、前田先生とお会いしまして、これはお公家さんのところに来たのじゃないかと思いました。今と違いました、昔は先生の行ないを見、先生の挙動を見、又先生の手術を見て自分で勉強するという時代でございましたので、先生を見ならいまして、私といえども段々と人柄が良くなったつもりでございます。教授室の、隣りが標本室という名前でございますが、要するに医局で、一部屋に岩原先生、その時は、まだ講師でございまして、私が来た時に助教教授になった時ですが、その他ここにおる野崎寛三先生、畠中先生、その他のお兄さんがおりまして、総勢僅かに十人足らずでございました。今日の整形外科を見ますと、一般の病院で、整形外科でちゃんとした人が来ますと、外科よりも患者が多い時代を今考えますと、非常に今昔の感がございます。その標本室でこういうお兄さん方に常にしごかれまして、しかも、フレッシュマン一人でございましたので、その点多少品性が悪くなったということはやむを得なかつたと思っております。

先程、天児先生から宿題報告の話がありましたけれど、当時宿題報告は、今みたいに、スライドもございません。表を大きなビラに書いておりまして、いちいち人がはがすのでした。それからプロシーディングなんかございません。演壇のわきに大きな行灯がありまして、そこに布に「緒言、一、第一章」なんというのを書いてあります、それを巻き上げるのでございます。で私は、フレッシュマン一人でございますから、「お前はそこへ乗れ」というので、学会の時に大きな脚立を持ちだしました。これで大分忍耐力が養成されたと思って居ります。まさに、今昔の感がございます。

先生にはいろいろ、じゃじゃ馬を馴らしていただきまして、ありがとうございます

ました。先生、どうぞ、これから益々お元気で、御多幸あらんことをお願いいたします。」

司会

「ありがとうございます。つづきまして、白田正雄先生お願い致します。」

白田正雄先生

「ご紹介にあずかりました白田正雄でございます。」

本日は開講五十周年ということでございまして、先生から最初に、整形外科の講義を受けたのは、八回生、武見太郎君のクラスでございます。私はその下のクラスですから、今日は、四十九年ということになるだろうと思えます。しかし、本日おいでになった方々の中では、八回生がおいでにならないところを見ると、ここにおられる方の中では、先生の講義を聞いたのは、私が一番古いということになるわけでございます。先生とのお付き合いは、それから始まりました。大学を卒業してから私は海軍に入りました。これは甲種合格で入営延期になっていたのは是非陸軍か海軍に入らなければならないような立場にありましたが海軍をえらんだのでございます。ところが、入ったその月、九月二十七日には満洲事変がおこり、翌七年一月には第一次上海事変というような異常な時局との関係がありました。そのまま海軍に残る事になりました。かくて、昭和十五年に海軍から、一つ前田整形外科にいつて、勉強して来い”という命令を受けまして、それで二度目の前田先生の教えを受けることになったようなわけでございます。

ところが昭和十六年十一月。実は十七年の三月迄ご厄介になる予定だったので、その昭和十六年十一月二十日付で、呉の海軍病院の整形外科へ行けという命令を受けました。”はてな、いよいよこれはおつぱじまりそうだぞ!”というような予感を持って、行ったわけでございます。果たせる哉、間もなく十二月八日開戦となりました。後になって調べてみますと、私が呉海軍病院に赴任を命ぜられたのが十六年の十一月二十日であり、連合艦隊が千島に集結の完了したのは、その十一月二十三日、そしてその二十六日にはハワイに向って、出撃したのであります。まあ、こういう時でございました。誠におこがましい考え方もありませんが、いよいよ政府が戦争の腹がきまったので、”配置につけ”と言うことで、その任につかされたような気がするのでございます。これと申しますのも、バックに前田先生のような大物がずらりとおられましたものですから、そういうたふうなことになったと、非常に喜んでゐる次第でございます。

当時の呉軍港は、横須賀、佐世保よりも、瀬戸内海にありまして、一番安全地帯だものですから、大海戦があると、あと連合艦隊はそこへ来る、勿論病院船も来るというような、いい地位にあったのでございます。

さて、そこで私が着任しまして、部長から「戦争が始まるについては、なに治療に関して、欲しいものはないか」といわれました。元来、呉病には沢山の手術機械がありました。が、ないもので一番に必要なのは大腿骨折等の牽引台で、これは先生のところでの勉強中、大腿骨折などの牽引は、しばしば担当させていた。だきまして、まあ、自信という程のことでない迄も、かたちだけは良く心得ておったものですから、部長に、「じゃ、あの整形外科の牽引台を五十台買って下さい。」と申しわけでございます。そうすると、部長さん、いまだその牽引療法などは、先程もお話しがありましたように、あまりやっていない時代でしたので、「大腿骨折の牽引台を五十台買え」といつて、おい、君、そんなに必要なのか？

「どうだい？」なんとというような話がありましたけれど、「いえ、こういう訳で、あアいう訳で」等と申しまして、「まあうちで使うだけでなしに、ほかの部隊にも出さなきゃならん。だから、ひとつ買って下さいよ。」と談じ込んだ結果、「じゃ、買うことにしよう。」ということになりました。戦はいよいよハワイから珊瑚海海戦へ、ミッドウェイの海戦へ、それから第一ソロモン海戦へとひろがり、それらの戦傷患者の一番新しいのを私が引き受けるような立場になりましたものですから、ずい分そのお教えをうけた牽引療法等々は、大いに腕をふるって、前田整形外科を海軍に導入した自信をもっておるような訳でございます。

この間山本連合艦隊司令官が二回、戦傷患者の見舞に来院されましたので、御案内し、牽引療法も沢山しておりましたので、いろいろ説明申し上げた次第です。

その後、軍艦に乗りまして、第二ソロモン海戦では航空母艦龍で沈められたり、ラバウルでは、第二艦隊の旗艦愛宕で、敵百十数機の爆撃をくらって艦長以下二十九名戦死しましたけれども、幸い私は無事で又、呉病に戻りました。

昭和二十年には呉が爆撃されるようになってから、三朝の分院長をやって、千人以上の患者を收容し、牽引や、手術を、思う存分やる機会が与えられましたが、いよいよ終戦になりましたから、呉海軍病院が敵に接收されましたので内容を大竹に移し国立大竹病院ということになりました。

戦後のどさくさで偉い人達が、だんだん抜けていってしまいましたので、私と仲間の御園生とが、一年余にわたって、大竹の国立病院を育て上げる責任を、負わされました（昭和二二年四月迄）。この間、昭和五十年、国立大竹病院から、「何か当時のことを書いてくれ。」という要望がありましたから、「国立大竹病

院の生立”という文を書いて出しておいたようなわけでございます（国立大竹病院創立三十周年記念誌）。

まあ、あれやこれや、若い時に思う存分に働いてみましたが、そのバックには前田先生の大物がついておられましたので、私達も安心して腕がふるえたということでございます。

本当に、どうも、先生ありがとうございました。」

司会

「ありがとうございました。」

野崎先生

「ええ、ちょっと補足説明いたします。先生は呉病で戦傷患者が全部太平洋から、こう来まして、その骨折患者を、勿論牽引療法もされましたけれども、その整復状態を確認する為に、全部透視下で、その整復状態を確認するという、非常に、我々の整形外科医の常識を越えた診断をされました。

先生、立って下さい。

その為に、先生は、レントゲン潰瘍になりました。えっ、何年前でしたかな？」

白田先生

「三十年頃からだ。」

野崎先生

「昭和三十年頃に、レントゲン潰瘍になりました。透視下整復術の為です。それを岩原先生が、診療顧問で、皮膚の形成術で、今日無事に、手術もされるようですが、まあ、癌になる、本当に一歩手前まで……」

白田先生

「なっただよ。なっただよ。なっただよ。なっただよ。」

野崎先生

「癌になった。癌になったけれど、昭和三十年ね、こういう本当に戦争犠牲者がおられ、なおかつ、今日、こうやって健存されることは、非常に我々敬服いたします。ご紹介します。」

司 会

「ありがとうございます。どうぞ、ごゆるりとご歓談いただきたくと存じます。」

「司会が大分不手際で申し訳ございません。只今、果物が出ておりますが、ここで西新助先生、一つお願いしたいと存じます。」

西 新助先生

「ご指名にあずかりましたので、出来るだけ短かくお祝いの言葉を申し上げます。先輩の先生方がまだおられますのに、私ご指名いただきまして大変恐縮でございます。私事で大変申し訳ないのですが、田舎の方に引込んでおりまして、一時間に三本きりしかない電車で、乗りつぎでやってくるものですから、それを見越して早く出て参りましたので、ここには三時間前に着いてしまいました。伺ったところがどなたもおられませんでした。おそらく司会の田中先生や、幹事の伊藤先生が、慌て者というような意味でご指名いただいたのかも知れません。」

本日は大変おめでとうございます。しかも大変お元氣な、恩師の前田先生をお迎えいたしましたので、このめでたい五十周年記念の祝賀会を催すことができました。我々不肖の弟子であります。大変喜びにたえない次第でございます。殊に、整形外科の元老の先生方が皆様ご参会下さいまして、ありがたいお言葉を沢山いただきました。我々弟子といたしまして、大変光榮に存じます。本日このおめでたい日に、私達、独り歩きもできないような、よちよち歩きの時代に、手をとって教えていただきました先輩の諸先生方が沢山おみえでございますし、又、優秀な数多くの後に続く人達が、共に一堂に会しまして、このお祝いができますことは我々にとりまして、この上ない喜びでございます。

ここで一つ思い出をのべさせて頂きます。ここに前田先生の大変お元氣なお姿をおみうけしまして、今更のように思い出します。私は戦争中の入局といいますが、か、いわゆる入室者でございます。私達同級生は八人も入局いたしました。皆戦争に出まして、第二乙種の私だけが教室に残っております。又、下も皆戦争に行きまして残っておりませんでした。どんな講義でも全部出ますし、教室の掃除から、下働きをやっております。どんな講義でも全部出ますし、教室の掃除から、その他一般の事全部引き受け所でありました。それはまあ、大変結構だったと思いますが、皆様のうちで、私程前田先生のお手を煩わしました助手はなかったのではないかと思います。前田先生のご退官の時の記念号にお書きしましたが、私はどうも、しょっちゅう怒られておりました。それで本日おみえの近藤先生に、そ

ういうお話をしましたら、”あの温厚篤実な前田先生に叱られるとは、お前は、よっぽどひどかったんだな。”といわれました。確かにその通りで、文字通り、ひどい弟子であつたようでございます。しかし、所変りまして、自分が、やっぱり人を叱らなければならぬような立場になりました時に、自分がまあ叱りました後に、前田先生のなされたような気持ちで果して叱ることができたろうかというのを考えまして、その度毎に、胸のしめられるような思いをしてまいりました。恩師からお叱りをいただくということは、これは弟子として、身に余る光栄ではないかと、つくづく感じまして頭が下がる思いであります。今でも前田先生の前では、ろくに口もきけない不束者でございますが、あれやこれやをみましても、どうも弟子の中で私は不肖の弟子の筆頭であつたと思えます。

先生、どうぞますますお元気で、今後永く永く、私達をお目におかけくださいますようお願いいたしまして終りにいたします。

どうも……。」

司 会

「ありがとうございます。本来でございましたら、各テーブルから代表に出していたいて、お話ししたくところでございますけれども、何分にも、不手際に不手際を重ねまして申し訳ございません。現医局の若いところを先生に即席でございますが、伊勢亀助教授、ひとつお話し願いたいと存じます。」

伊勢亀先生

「前田先生、おめでとうございます。」

私自身、三十七回生ですので、前田先生のお教えは受けておりません。しかし、私が医局長をしております時に、先生が院長をしておられました立川共済病院の出張につきまして、コストの面で、ちょっとお話ししましたら、”金のことをいう医者育てた覚えはない。”と怒られた覚えがございます。非常に恐縮いたしましたその時以来、前田先生の医人としての人柄に触れまして、大変申し訳なく思っております。

今、急に指名されて、何を言っているか困惑しております。前田先生といえますと、私はNHKの相模で前の方でいつも観戦している先生という遠い感じを受けております。あとは、”前田山と関係があるんじゃないか”とか、”私も早く横綱審議会に入れるような医者になりたいなあ”とか、”なまの相模をみせてもらいたいなあ”という感じで、いつも先生のお顔をテレビで拝見しております。

した。今日はこの近い席から、テレビじゃなくて、じきじきお顔を拝見いたしまして嬉しく思っております。今後、ますますいい横綱を育てていただきたいと思えます。教室の方は、皆頑張っておりますので、その点ではご心配ないと思えますけれども、日本の国技である相撲の方を、これからも、ますますお元気で、立派に育てていただきたいと存じます。簡単でありますけれども、どうも本日は、おめでとうございました。」

司 会

「ありがとうございます。」

ご歓談、なおつきないところと存じますが、ここで閉会の詞を泉田先生にお願いしたいと存じます。」

泉田教授

「大変僭越でございますが、ご紹介いただきました泉田でございます。」

本日、前田先生開講五十周年記念祝賀会におきまして、大勢、特に雛壇にお並びの名倉先生、近藤先生、片山先生、天兒先生、皆様ご参集いただきまして、錦上花を添えていただきましたこと誠にありがとうございます。かえりみますと、前田先生、諸先生方が、雛壇にお並びの先生方勿論でございますが、基礎を置かれました日本整形外科学会も、今年で会員数七千三百を数えます。教室も、現在の教室員の数は、四百三十を越えました。おそらく、私共が整形外科医になりました時の、日本全国の整形外科医の数を上まわるであろうかと思っております。これら、ひとえに、前田先生、諸先生のおかげでございます。私共、弟子といたしまして、今後ますます、この整形外科の発展に、力を尽したいと存ずる次第であります。どうぞ前田先生にも、是非、私共を見守っていただきたいと思う次第でございます。

前田先生のご健康を祝しまして、万歳を三唱いたしたいと思います。ご起立、ご唱和をお願いいたします。

前田先生のご健康を祈りまして、万歳を三唱いたします。万歳、万歳、万歳。ありがとうございますました。」

拍 手

司 会

「これにて、記念祝賀会を閉会いたしたいと存じます。ありがとうございますました。」

新人紹介

- ① 生年月日
- ② 出身校
- ③ 趣味
- ④ 入局の動機
- ⑤ 入局後の感想

昭和五三年度入局

松本 秀 男

- ① 昭和二九年二月一二日
- ② 日比谷高 ↓ 慶応
- ③ サッカー、スキー、ピアノ
- ④ 医局の秘書がよかったから。
- ⑤ 居ごこち最高！

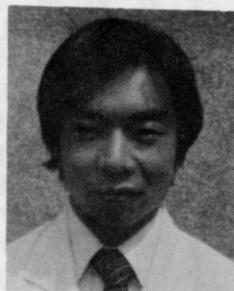
木村 記 行

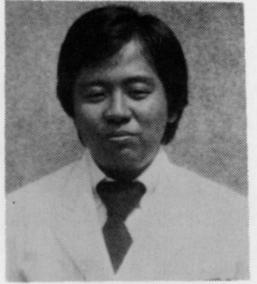
- ① 昭和二七年四月一八日
- ② 川崎高校 ↓ 福島県立医大
- ③ 読書
- ④ 整形の守備範囲の広さに魅かれました。
- ⑤ 居心地最高です。

野 田 幸 男 (リハビリ)

- ① 昭和二八年八月二八日
- ② 慶応志木 ↓ 慶応
- ③ つり
- ④ 教室の雰囲気

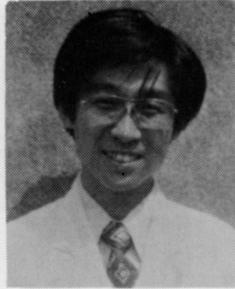
運動技能を重視する所が他科と異なるため。
 ⑤ 人柄の良い先生が多く、学問も底が深い。





高山 真一郎

- ① 昭和二八年五月一八日
- ② 教育大附属駒場高校 ↓ 慶応
- ③ スキー、サッカー
- ④ 学生の時、ポリクリを回ってみて整形外科が一番よくわからなかったため。
- ⑤ 一年間やってきましたが、増々わからないことが増えました。



椿原 彰夫 (リハビリ)

- ① 昭和二八年四月一三日
- ② 淳心学院高校 ↓ 慶応
- ③ 庭球
- ④ 将来への展望
- ⑤ カラッとした明るさに満ちている。



阿部 均

- ① 昭和二三年七月二二日
- ② 慶応高 ↓ 東邦大医学部
- ③ レコード鑑賞、ゴルフ、マージャン、ビリヤード、車、勉強
- ④ 整形外科を本格的に勉強したかったので。
- ⑤ 慶応のレジデントの教育の内容は日本一だと思います。やつとワタクシにも運が向いてまいりました。よく勉強できる場所なので頑張りたいと思います。



鷺谷 一郎

- ① 昭和二八年八月九日
- ② 宇都宮高 ↓ 東医大
- ③ 野球、クラシック鑑賞
- ④ 小さい頃から整形にあこがれていた。
- ⑤ いい先輩が多く、居心地最高です。



朝妻孝仁

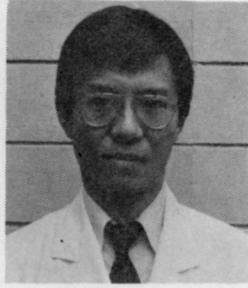
- ① 昭和二八年六月一七日
- ② 慶応高校 ↓ 慶応
- ③ スポーツ一般（スキー、テニス、陸上競技）、食べ歩き
- ④ 整形は守備範囲も広く将来も有望と思った。
- ⑤ 面倒見のいい先生が多い。なごやかな雰囲気の中にも厳しさが有り、居心地が良い。

塚原茂

- ① 昭和二六年八月五日
 - ② 甲府第一高校 ↓ 慈恵医大
 - ③ 音楽鑑賞、カメラ、剣道
 - ④ 慶大整形の教育方針にひかれて。
 - ⑤ 入局してよかった！
- 頑張りたいと思います。

永田雅章

- ① 昭和二八年一月一三日
- ② 開成高校 ↓ 慶応
- ③ ヨット、スキー、映画鑑賞
- ④ まだまだ未知な分野で、これから発展するので、自分の可能性をためてみたい。リハビリは、いろいろな科と関わりをもてて面白いのではないか？
- ⑤ まだリハビリのことは、わからないが、一生懸命やってみたい。



昭和五四年度入局

宮川 俊一



- ① 昭和三〇年三月一二日
- ② 慶応志木校 ↓ 慶応
- ③ 美味なものを味わう事
食物、音楽、読書……その他
- ④ 自分の人生を燃焼させるには、整形に入る事が最良だと思ったので。
- ⑤ 充実感にあふれすぎて、少々過労気味です。

浦部 忠久

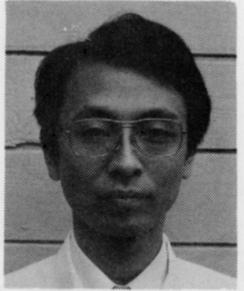


- ① 昭和二八年一月二八日
- ② 高崎高校 ↓ 群馬大学医学部
- ③ 趣味：寝ること、テニス、冬はスキー
特技：乗り物の中以外だったら、どこでも寝られること。
- ④ 整形しか考えてませんでした（予備校に通っていた時の東京の生活が忘れられずに再び上京してきました）。
- ⑤ とてもやさしくいいお兄さん達ばかりでやっぱ外科系は僕に大変合っていたなあと思っています。

里 宇明 元



- ① 昭和三〇年一月三〇日
- ② 慶応高校 ↓ 慶応
- ③ 1. サイクリング、2. 登山、3. 山の手線の中で昼寝をすること（最高三週の記録あり）。最近はそのようなとりもない、悲しいことです。
- ④ 入局してないので何とも申しかねますが整形もおもしろそうですね。
- ⑤ 整形外科をローテイトして感じたこと、“医者は頭ではない、からだである。”これからでも遅くない。からだを鍛えよう！



森岡英雄

①昭和三〇年一月一二日

②慶応高校 ↓ 慶応

③旅行

④自分は痩せていて、他の人より骨の占める割合が多く、特に興味をもった為。

⑤当直が少しばかりきついついけれど、充実した楽しい毎
日を送っています。

山田治基

①昭和二九年六月二七日

②東海高校 ↓ 慶応

③水泳

④慶応以外の外回りの機会が多いと思つた事。

⑤様々な先輩とめぐり会えて、毎日新鮮な気持で仕事
ができ、入局して良かったと思っております。

宇佐見 則 夫

①昭和二八年一月一四日

②慶応高校 ↓ 慶応

③音楽、旅行、競馬（以前はよく馬券を買っていまし
た。医学より詳しいのでは……?と思っております。）

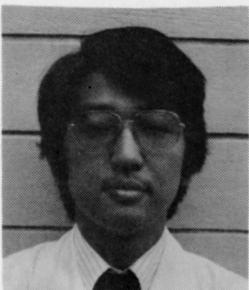
④内科系ほど頭を使わなくてもよいのでは……? 外
科ほど体力が必要でないのでは……?と思つたから。

⑤整形は頭も体力も必要なのですな~~~~~!???



山田 久孝

- ①昭和二九年七月三〇日
- ②慶応義塾普通部↓慶応高校↓慶応大
- ③テニス、サッカー、音楽鑑賞
- ④学二の時サッカーの試合で腰から落ち、当科外来にて伊勢亀助教授に診ていただいた際「PSRの中核は何番だね」という試問の答えにつまんだところ、「君の様な人は整形ぐらいしか入れてくれないよ」と言われ、当時純粹だった私は、その言葉を真に受け、それ以来整形に興味を持つようになった。
- ⑤伊勢亀助教授の御言葉が正しかった事を痛感しております。



靱 持 和 彦

- ①昭和三〇年三月一四日
- ②私立灘高校 ↓ 慶応大
- ③サッカー、スキー、テニス、野球、麻雀
- ④整形外科しか考えていなかった。
- ⑤入局二カ月後に、ネフローゼになり急に体力に自信をなくしたが、再発しない限り整形外科医として努力したいと思う。自由に仕事のできる整形外科に満足している。



中 邨 裕 一

- ①昭和二八年六月三〇日
- ②宇都宮高校 ↓ 岐阜大学
- ③テニス、スキー、JAZZ
- ④子供の頃よりあこがれていた。
- ⑤やさしくて力持ちのお兄さん達に囲まれて、とっても幸せです。

教室人事

53年度 インストラクター人事

53・4 浜松赤十字病院医長
 53・6 都立大久保病院医長
 53・8 大田原赤十字病院医長
 53・8 厚生連魚沼病院医長
 53・9 芳賀赤十字病院医長
 53・11 都立松沢病院医長
 53・11 月が瀬リハビリテーションセンター講師

小村長久青小
 林上沢保井木林池
 信隆正二善慶
 男一彦郎昭二昭
 君君君君君君

54年6月人事 インストラクター人事

都立大久保病院
 公務員共済組合立川病院
 濟生会中央病院

東京電力病院
 日野市立病院
 防衛医科大学
 都立松沢病院
 国立療養所箱根病院
 警友病院
 濟生会神奈川県病院
 小田原市立病院
 平塚市民病院
 伊勢原協同病院
 東海大学
 埼玉中央病院
 濟生会宇都宮病院
 足利赤十字病院
 静岡赤十字病院
 慶應婦局

柴崎昌浩君
 鷗銅茂君
 芦田多喜男君
 坪山寿郎君
 井口傑君
 堀内行雄君
 山岸正明君
 森田勝君
 石黒隆君
 内藤信隆君
 大岩俊久君
 加藤隆史君
 坂巻豊教君
 増田隆一郎君
 岡田義範君
 田中義則君
 安藤謙一君
 河西藤君
 河立成君
 足立秀頭君
 倉林博君
 崎原宏君

54年6月人事 レジデント人事

国立東京第二病院

国立小児病院

公務員共済組合立川病院

日本専売公社東京病院

済生会中央病院

国立療養所村山病院

稲城市立病院

福生病院

都立清瀬病院

防衛医科大学

川崎市立川崎病院

警友病院

公務員共済稲田登戸病院

済生会神奈川県病院

小田原市立病院

平塚市民病院

伊勢原協同病院

東海大学

埼玉中央病院

国立埼玉病院

浦和市立病院

済生会宇都宮病院

大田原赤十字病院

国立塩原温泉病院

国立栃木病院

足利赤十字病院

芳賀赤十字病院

木原	泉田	松本	吹本	飯島	菅沼	渡辺	高田	吉峰	塚原	矢部	斉藤	石橋	山中	吉井	鷺谷	松林	広本	木村	湯沢	藤田	小林	朝妻	持田	横井	藤中	大田	宮川	樋口	岩瀬	三倉	斉藤	水品	原石	白石	文		
未知也	良一	秀男	武憲	謹之助	憲一	知明	史博	啓夫	聖二	徹	芳	新一郎	經世	明敏	記行	喜志雄	享介	保範	孝仁	讓治	秋天	星兒	英和	準隆	正剛	勇剛	正史	彰彦	貴	健	博	史	史	君			
君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君

佐野厚生病院
 こども福祉医療センター(旧称ひばり学園)
 東京歯科大市川病院
 太田病院
 飯田市立病院

浜松療護園
 静岡赤十字病院
 清水市立病院
 月が瀬リハビリテーション

高岡市民病院
 伊勢慶應病院
 厚生連魚沼病院
 慶應婦局

高岡市民病院
 伊勢慶應病院
 厚生連魚沼病院
 慶應婦局

” ” ” ” ” ” ” ”
 森 塩 松 添 戸 道 井 岩 浜 大 根 渡 西 高 石 西 高 太 齐 田 岡 藤
 尻 本 田 山 振 上 上 田 熊 本 辺 山 山 倉 川 畑 田 藤 崎 村 井
 謙 邦 修 芳 義 慶 哲 一 哲 孝 和 真 一 雄 司 司 実 夫 一 仁 治
 一 彦 昇 一 昭 治 三 郎 寿 夫 一 良 男 郎 雄 司 司 実 夫 一 仁 治
 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君 君

【海外留学】

53年7月 鈴木 信正 君 カナダ
 54年9月 岡 義範 君 アメリカ
 54年6月 富士川 恭輔 君 イギリス
 7月 若野 紘一 君 アメリカ

【帰国】

53年9月 井口 傑 君 スウェーデン
 53年7月 石井 良章 君 アメリカ

住所変更等

- 243 富士川 恭 輔 (在英)
(住) 3 Sandy Walk, Bramhope, Leeds, England
(留守宅) 世田谷区三宿二一―一― 富士川俊輔方
TEL (四一三) 六六九九
- 260 宇 沢 充 圭 開業 (宇沢整形外科)
(勤) 〒三七四 群馬県館林市松原一―三五六
TEL (〇二七六七) (四) 八七六一
(住) 同
- 282 芦 沢 真 臣 開業 (芦沢外科)
(勤) 〒四〇〇―一― 山梨県中巨摩郡竜王富竹新田一五〇―
TEL (〇五五二七) (六) 八五六六
(住) 同
- 287 松 賢次郎
(住) 〒二四二 神奈川県大和市つきみ野七―九―一六
TEL (〇四六二) (七四) 七五一〇
- 288 伊 藤 恵 康
(住) 〒一九四 町田市成瀬一六〇―一三七
- 289 加 藤 隆 史
(住) 〒二五〇 小田原市久野七―一―三
TEL (〇四六五) (三四) 三一七五 (内三四一)
- 303 海 村 昌 和 開業
(勤) 〒一九〇 葛飾区小宮四―一八―一

304 若野 紘一 (在米)

(留学先) c/o Division of Materials Engineering Univ. of Iowa, Iowa City,

Iowa 52242. U. S. A.

(留守宅) 〒九二〇 石川県金沢市東山二一〇一

319 河西 成 顕

(住) 〒三二六 足利市本城二丁目四〇〇三一二 第2陽光台マンション三〇二

TEL (〇二八四) (四二) 二三四一

322 坂 卷 豊 教

(住) 〒二五四 平塚市黒部丘一三九九一二 桃山コーポ二一〇

TEL (〇四六三) (三一) 二三六一

326 須 田 公 之 開業

(勤) 〒二四四 横浜市戸塚区矢部町九六九一三九

TEL (〇四五) (八六一) 四八一三

(住) 同

334 足 立 秀

(住) 〒四二〇 静岡市池ヶ谷二六五一一 森脇ハイツ三〇二号

TEL (〇五四二) (四七) 七〇〇四

340 坪 山 寿 郎

(住) 〒二七〇 千葉県松戸市ニッ木一九〇三 鶴ハイム五〇七

TEL (〇四七三) (四五) 二九八〇

351 安 藤 謙 一

(住) 〒三二〇 宇都宮市駅前通二一三一一 ファミールマンション六〇三号

TEL (〇二八六) (三五) 二一九一

354 崎 原 宏

(住) 〒二七二 市川市八幡三一二一三

TEL (〇四七三) (二六) 一一六一

295 磯 田 功 司

(住) 〒四二〇 静岡市古庄六九六一六

TEL (〇五四二) (六三) 〇八〇二

編 集 後 記

今回の「ふるさと」は、前田和三郎先生の整形外科開講五十周年記念号として発刊致しました。内容は過日ホテルオークラで行なわれた記念式典の再現を主としてあります。

一口に五十周年記念と申しますが、これはなかなか大変なことで、お若くして教授になられ、その上非常に健康にめぐまれました前田先生にして初めて出来得たことと拝察致します。

今私の手もとに昭和一六年発行の「慶應義塾大学医学部二〇周年記念誌」があります。その中に『医学部創立当初、整形外科は未だ独立せず、外科の一部に於いて桂講師が整形外科方面を担当し大正一〇年一二月に至り整形外科は外科より分立した。大正一一年六月前田友助教授新任し、当時の整形接骨科の主任となった。昭和二年九月前田友助教授、昭和三年一月桂助教授相次ぎ辞任。昭和三年一二月前田和三郎教授の就任によって旧整形接骨科は整形外科と改称され、その面目は一新せられ、慶大整形外科は内外共に新しい発足をなすこととなった。』とあります。

爾来幾星霜、現在我が同窓会々員数は五〇〇人になんなんとし、慶大整形の名は内外に確固たる地位を築いて、当時の一本の若木は大木に成長しつつあります。前田先生の整形外科開講五〇周年を一つの記念すべき碑として、更に新たなる発展に向って、同窓諸先生の各方面での御活躍を心から期待致しております。

尚今回の「ふるさと」は、五三年・五四年合併号となりましたことを御諒承下さい。

昭和五四年八月一七日

同窓会幹事長

宮 本 銈 造

追 記

原稿の整理も終り、編集後記も脱稿した本日、くしくも前田先生の訃報に接しました。病重しの報を得まして、せめて御生前にお届けしたいと思っております。誠に残念でなりません。幹事の怠慢を御霊前にお詫び申し上げると同時に、この記念号を読み乍ら、会員諸先生と共に今は亡き前田先生の御冥福を祈り度いと思えます。

昭和五四年九月 発行

